

緑の仙境、和歌山

楊金暉

和歌山大学大学院経済学研究科 中国

もし私の心の中で、東京が日本の流行と先進性を表し、京都が日本の文化と誇りを表し、大阪が日本の反骨精神と個性を表すのだとすれば、和歌山はまるで隠者のような存在であると思う。神聖でありながら、どこまでも謙虚である。和歌山は、自分の魅力を急いで外へ見せようとはしない。繁華さによって自らの価値を証明しようとしもしない。ただ静かに、山と海、川と田畑、そしてそこで暮らす人々を見守りながら、雄大な自然とささやかな日常の両方を、その懷に抱いている。

私にとって、和歌山は「みかん」のような場所である。素朴な田野の中で、青々とした木々が枝を伸ばし、やがて黄金色の果実を実らせる。その飾らない豊かさこそが、和歌山らしさなのだと思う。

私は加太線沿線の東松江という場所に住んでいる。毎朝大学へ向かうとき、土入川の河岸をゆっくり歩く。川の中では魚たちが自由に泳ぎ回り、時には小さな泡を立て、時には水面から勢いよく跳ね上がる。ふと目をやると、岸边から小さなカニが姿を見せることもある。まるで私と一緒に梶橋を渡り、梶橋の向こう側まで送り届けてくれているように感じられる。

和歌山の人々を思い浮かべると、私の心にはいつも、温かい笑顔が浮かぶ。東京のように足早に過ぎていく人々とは少し違い、和歌山の人々には、穏やかで謙虚なやさしさがある。入学前、私はすでに和歌山へ引っ越していた。新しい生活に慣れるため、そして体を動かすために、家の近くにある市民センターのプールへほとんど毎日のように通っていた。子どものころ、兄から少しだけ平泳ぎを教わったことはあったが、十年以上も経っていたため、ほとんど忘れてしまっていた。不器用な私は、そこで一人のやさしく、元気なお爺さんと出会った。その方は、腕の動かし方、足の引き寄せ方や蹴り方、そして呼吸のリズムまで、とても丁寧に教えてくださった。

私が和歌山大学に合格し、和歌山へ引っ越したと聞いて、京都で勉強している友人が遊びに来てくれた。当時の私は、まだこの町のことをあまり知らなかった。そこで私たちは一緒に和歌山城へ行った。天守閣に立ち、四方から町を見下ろしたときの景色を、私は今でも忘れることができない。連なる山々、人々が暮らす街並み、広がる田畑、そして遠くに見える海。その瞬間、私は和歌山の大切な風景を一度に胸の中へ収めたような気がした。

同時に、私は自分が和歌山へ来た意味を少し理解したように思う。ここでただ勉強するだけではなく、この土地に実際に身を置き、ここに暮らす人々の生活や地域が抱える課題を理解していくこと―それが、私にとって和歌山で学ぶ意味なのだと感じた。

入学後、私は和歌山大学で学び始め、多くの志を同じくする友人たちとも出会った。春になると、私たちはよく一緒に出かけ、桜を眺めたり、和歌山の豊かな自然を感じたりした。

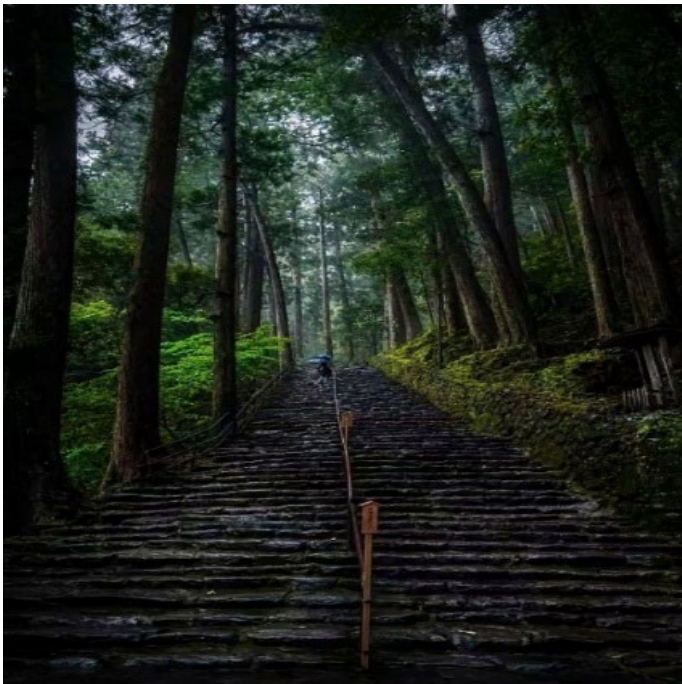
五月二日と三日には、友人たちと熊野古道へも向かった。山道は静かに森の奥へと続いていた。石段は雨と長い歳月によって磨かれ、しっとりとなめらかに光っていた。道端の

苔は新緑を帯び、青草の色が目にはやさしく映った。古い森の道を歩いていると、時折、澄んだ水のせせらぎが聞こえ、鳥の声がそっと寄り添ってくる。空気は湿り気を含みながらも清らかで、風には木々と土の香りが混ざっていた。まわりのすべてが、春によって新しく洗い直されたかのようにだった。

二日目は激しい雨のため、予定していた巡礼の道を進むことはできなかった。その代わりに、私たちは那智の滝を見に行った。雨の中、石畳の道を踏みしめて進むと、遠くの山々は濃淡のある黛色（たいしょく）に染まり、木々は雨に洗われていっそう鮮やかな緑をまとっていた。薄暗い夕暮れと湿った空気が重なり合い、山全体に一枚の薄い紗がかかったように見えた。朧（おぼろ）な暮色の中、わずかに残る金色の光が水面に揺れ、深い山と青々とした木々の間から、滝が高い場所からまっすぐに落ちていた。滝が落ちる姿は銀河のようで、そこから跳ね上がる水しぶきや雨気が灰色の霧のように広がり、さらに周囲の薄暗い夕暮れの光を受けて、白い煙のようだった。水の音は谷間に響き、雨、山の色、滝、雲と霧が一つに溶け合っていた。その景色の中に立っていると、自分がゆっくりと広がっていく一幅の山水画の中へ入り込んだように感じられた。

和歌山は、このようにして私に語りかけてくる。経済的な繁栄や文化的な華やかさによって自らの魅力を証明する必要はない。人はただ山水の間に立つだけで、自然と敬意を抱く。和歌山の美しさは、声高に語られるものではなく、静かに心の奥へ届いてくるものなのだ。

帰りの朝、バスに座っていると、車内の冷たい空気が、露出した腕にそっと触れた。窓の外では、木々がすでに青々と茂っていた。春の陽光はバスの窓ガラスを通り抜け、生命力に満ちた木々の影とともに、私の顔にやわらかく差し込んできた。和歌山の、あの活力に満ちた自然が育んだ生命の力は、私にもう一度、世界への好奇心を与えてくれた。



麓野仙踪

氏名 杨金晔

所属 国籍 中国

如果说，在我心中东京代表了日本的潮流与先进，京都代表了日本的文化和骄傲，大阪代表了日本的叛逆与个性，那么和歌山更像一个隐士，神圣而谦虚。它不急着向外界展示自己，也不需要用繁华来证明自己的价值。它只是安静地守着山、海、河流、农田和生活在这里的人，把磅礴的自然与细小的日常都收自己的怀里。对我来说，和歌山就像みかん，在朴实的田野里，翠绿的树，结出了金黄色的果实。

我住在加太线沿线一个叫东松江的地方。每天上学时，我都会沿着土入川的河岸慢慢走。鱼儿在水中自由穿梭，一会儿吐着泡泡，一会儿又跃出水面。偶尔还能看到小螃蟹从岸边爬出来，仿佛陪着我一起过桥，把我送到梶桥的另一边。

在开学之前我就搬过来了，刚来到这里的时候，为了锻炼身体，我几乎每天都会去家附近的市民中心游泳。虽然小时候曾跟哥哥学过一点蛙泳，但十几年过去，早已忘得差不多了。笨拙的我在那里认识了一位慈祥而充满活力的老爷爷。他非常耐心地教我如何摆动手臂、如何收腿和蹬腿，以及怎样调整呼吸节奏。提起和歌山的人民，不似东京行色匆匆，永远是一份温和的谦逊的笑脸。

听说我考上和歌山大学搬到和歌山后，一位在京都读书的朋友特地来找我游玩。那时我对这座城市还不算熟悉，于是我们一起去了和歌山城。站在天守阁上，从不同方向俯瞰城市，眼前的景色让我至今难忘。连绵起伏的山峦，人们生活的街区，农田与大海。那一刻，我仿佛将和歌山最珍贵的风景尽收眼底。也更加明白了我来到和歌山的意义，真正走进这片土地，理解它的生活与课题。

开学以后，我进入和歌山大学学习，也结识了许多志同道合的朋友。春天来临时，我们常常相约踏春赏樱，感受和歌山丰富的自然风光。五月二日和三日，我还与朋友一起前往熊野古道。山路静静延伸至树林深处，石阶被雨水与岁月打磨得温润光滑，路边的苔藓泛着新绿，草色青青映入眼帘。古老的森林路中，时有溪水潺潺，时有鸣鸟相伴，空气湿润清新，风里夹杂着树木与泥土的气息，周围的一切仿佛都被春天重新洗涤过一般。第二天由于暴雨我们没有继续朝圣之路，去看了那智瀑布，踏过石板路，在雨幕中，远处的山呈现出深深浅浅的黛色，树林也被洗的更加翠绿。暗暗的黄昏暮色和湿润的空气交织在一起，仿佛给整座山披上了一层轻纱。朦胧的暮色氤氲，残金潋滟，黛山翠木之间，瀑布从高处落下，银河，白烟，灰雾。水声在山谷间回响，雨水、山色、瀑布和云雾融在一起，让人感觉自己好像走进了一幅缓缓展开的山水画。和歌山就这样，不需要用经济和文化底蕴证明它的魅力，人站在山水之间，自然而然地感到敬畏。

返程的清晨，坐在公交车上，车上的冷气吹在我裸露的小手臂上。窗外的树已经郁郁葱葱，春天的阳光透过公交车的玻璃映过这些生机勃勃的树木现在我的脸上。和歌山那种活力满满的自然孕育出来的生机的力量，重新赋予我对世界的好奇心。